

序章 調査の概要と遺跡の立地

亀井節夫 宇野隆夫

1 調査の概略

本報告書は、京都大学構内遺跡調査会が、京都市左京区北白川追分町京都大学北部構内に所在する「北白川追分町遺跡」で昭和53年度に実施した京都大学理学部物理学科校舎新営工事に伴う発掘調査の成果を、京都大学埋蔵文化財研究センターが収録したものである。また昭和52年度に実施した試掘調査の成果も、あわせて付記した。なお、両者とも古墳時代以降については、すでに概要報告⁽¹⁾で詳細に述べたため、本報告書では割愛した。

(1) 発掘調査に至る経過と組織

北白川追分町遺跡は、本学考古学講座の創始者である濱田耕作氏により大正12(1923)年に発見された⁽²⁾⁽³⁾。そして本遺跡は当時、山城における唯一の縄文遺跡として高く評価されたが、遺物採集後の4地点における試掘調査(図2-1地点)では遺物が出土せず、当時おこなわれていた農学部敷地の地均し工事によって遺跡の主要部が破壊されたと判断された。その後、小規模な工事に伴って、少量の縄文土器は発見されたが、遺跡の遺存状態については約50年の間、不明のままであった。

昭和46年にいたり、農学部本館西棟の工事に際して、堆積物の観察をおこなっていた石田志朗理学部助教授は、地下約2mの砂層中に黒色土層を発見し、この層中から弥生土器を採集した⁽⁴⁾(図2-4地点)。この再発見を契機として、以後の工事に注意が払われるようになり、昭和47年には理学部事務棟の新営工事中に地下約1.5mの所に縄文・弥生時代の確実な包含層が遺存していることが明らかになったのである⁽⁵⁾。

昭和47年以後、本学構内地区割によるBG36区(農学部ガラス温室)⁽⁶⁾、BD35区(理学部附属ノートバイオトロン実験装置室)⁽⁷⁾、BE32区・BE33区(農学部校舎北棟)⁽⁸⁾⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾と次々に縄文遺跡の発掘調査をおこない、それと併行して実施した埋設管工事に伴う立合調査、試掘調査の結果とから、縄文時代と弥生時代の旧地形の復原と遺跡の分布範囲の確認ができるようになった⁽¹¹⁾。このような調査研究が進む中で、昭和52年度に、電気管理設工事に伴って当地で実施した試掘調査において、多量の植物遺体が出土し、下層の植物遺体は縄文中期の土器、上層の植物遺体は縄文晩期の土器と共伴することがわかった⁽¹²⁾。この試掘調査によって、当地が、縄文時代の居住区である北白川扇状地末端の微高地に接する低湿地で

あること、当時の植生・気候・植物質食料を解明する資料となる植物遺体が良好な状態で遺存していることが判明したのである。

昭和53年、BE29区の理学部宇宙物理学科等校舎の発掘調査で、他に例をみない火葬塚が発見され、⁽¹³⁾現地での保存が決定されたため、当地に宇宙物理学科校舎新営が予定されることになった。そこで当時、京都大学構内遺跡調査会長であった亀井節夫理学部教授の御尽力によって、出土が予想される動・植物遺体の処置をおこなえる体制を整えて後に発掘調査に臨むことになった。発掘調査にあたって組織した調査委員会および調査班の構成は次のとおりである。なお職名は当時のものを用い、敬称と京都大学関係者の大学名を省略した。

調査会長：亀井節夫（理学部教授）

調査委員：樋口隆康（文学部教授）、西川幸治（工学部教授）、石田志朗（理学部助教授）、西村進（教養部助教授）、泉拓良（埋蔵文化財研究センター助手）、小野真海（事務局庶務部長）、林忠四郎（理学部長）、中山忠之（京都市文化観光局文化財保護課長）

調査協力者：粉川昭平（大阪市立大学理学部教授）、

山田治（京都産業大学理学部助教授）

監事：西村利雄（施設部企画課長）、位ノ花一郎（理学部事務長）

調査班長：泉拓良（埋蔵文化財研究センター助手）

調査主任：西田正規（理学部助手）、宇野隆夫（埋蔵文化財研究センター助手）

(2) 発掘調査

調査区の北半には地表下1.5mまで基礎のある旧物理学科校舎があったため、地表下1.5～2.0mにある黄色砂層を境にして、上・下2回にわけて発掘することにした。この黄色砂層は本学北部・本部・教養部構内で広くみられる層であり、弥生前期末～中期初頭に堆積した白川起源の砂層である。⁽¹⁴⁾したがって、上部すなわち弥生中期以後の遺跡調査は南半部の300㎡であり、縄文時代と弥生前期の遺跡調査は643㎡の面積であった。上部の発掘調査は8層に区分しえた層序のうち一部にしか分布しない2層を除き、6面に分けて分層発掘をおこない、42本の溝と土坑を検出したが、その多くは中世後半～近世の耕作に伴う遺構であった。⁽¹⁵⁾弥生中期以後の発掘調査を終了した時点で旧物理学校舎を解体し、黄色砂層を機械で掘削した後、昭和54年1月4日から下部の発掘調査を開始した。そして弥生前期から縄文晩期までを、もっとも細分できる地点で27層にわけて発掘し、縄文中期は

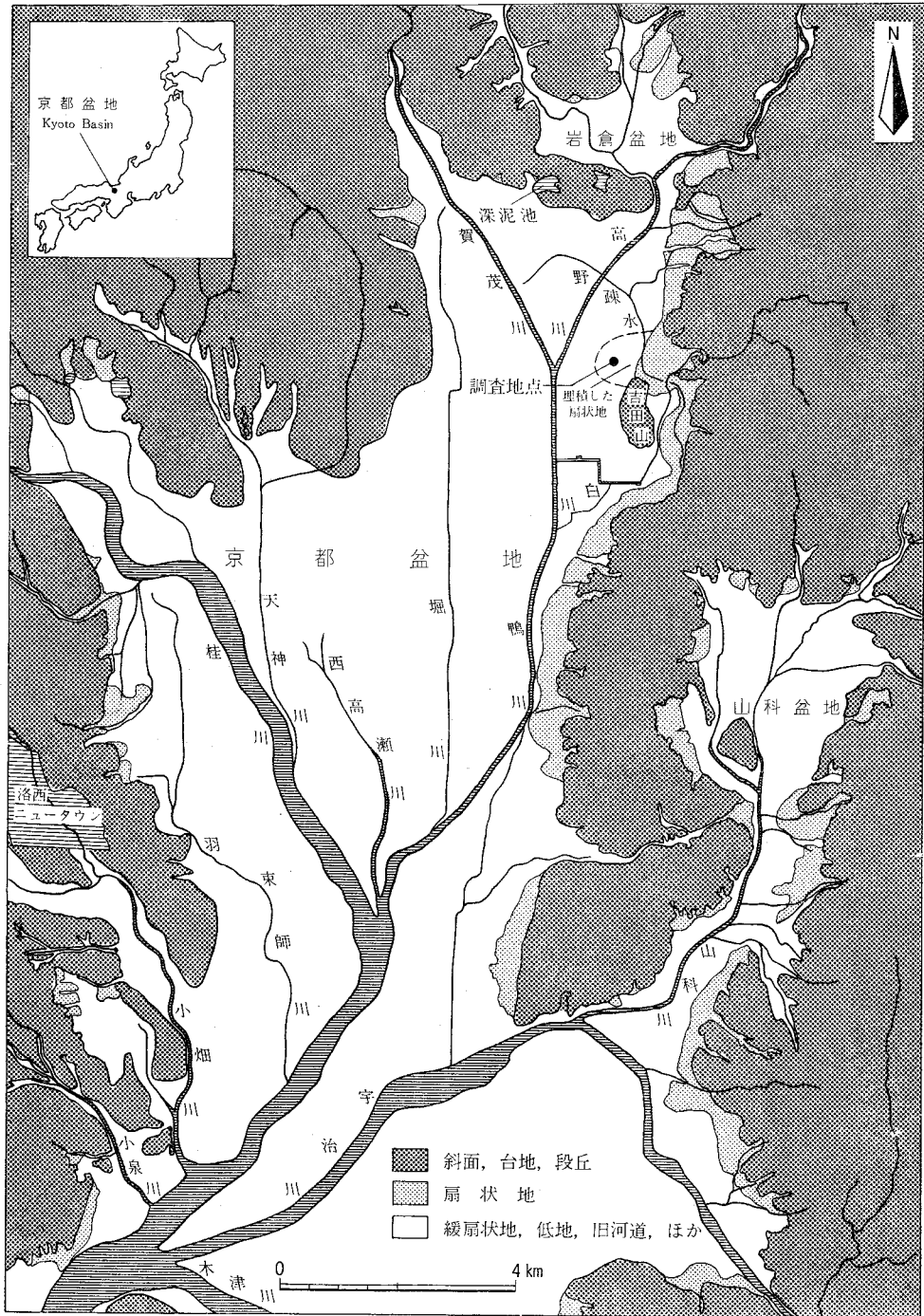


図1 京都盆地の地勢と調査地点 縮尺 1/125000
 (国土地理院発行土地条件図「京都」昭和52年をもとに作成)

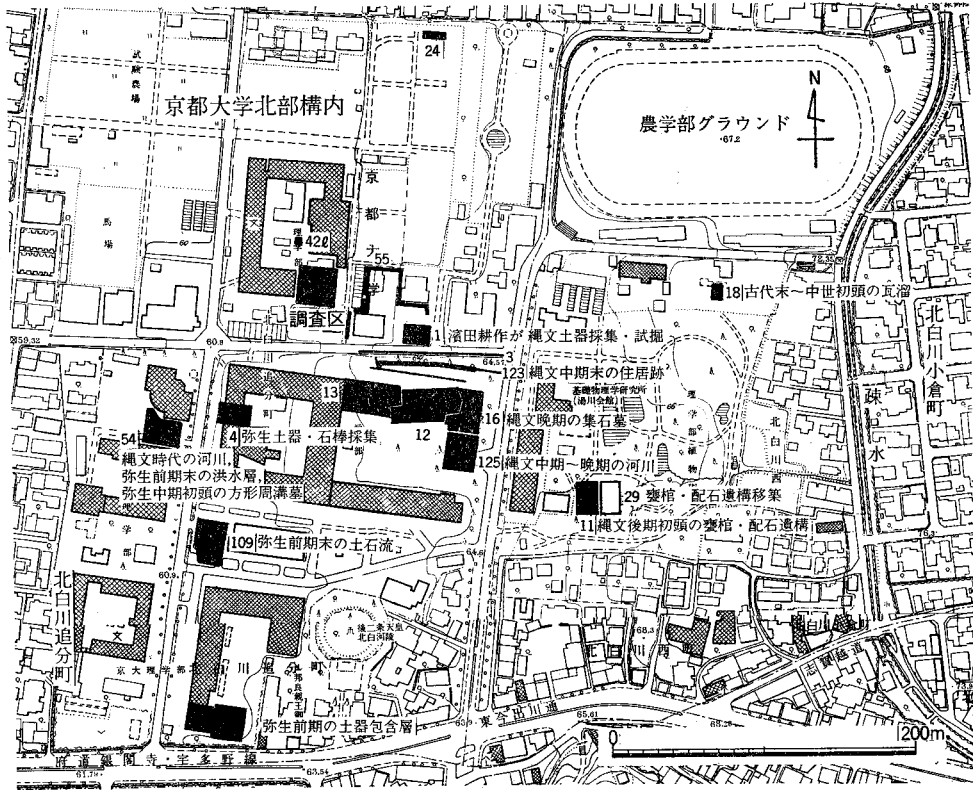


図2 調査区と付近のおもな調査地点 縮尺 1/5000

(番号は『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』1984年, 図版1に同じ)

6層において発掘した。最後に洪積世の堆積と思われる礫混りの砂層を截ち割り、3月30日に発掘調査を終了した。調査中に縄文晩期を中心にして、泥炭質層から多量の動・植物遺体が出土したため、地点を定めて、塊で泥炭質層を採取した。また倒木については、木質の資料を採取する一方、出土状態の平面図を作成し、かつ地形図作成のための測量をおこなった。現場における作業の分担を以下に示す。なお職名・所属は調査当時のものを用いた。

発掘調査全般：亀井節夫，泉拓良

泥炭質層の採取と遺物：泉拓良，宇野隆夫

堆積物の観察：石田志朗，竹村恵二（京都大学理学部大学院生），

飯田義正（京都大学理学部大学院生）

植物遺体全般：粉川昭平，南木陸彦（大阪市立大学理学部大学院生）

花粉・珪藻分析試料の採取：中堀謙二（京都大学農学部大学院生）
大型植物遺体・動物遺体の篩別：岡崎美彦（京都大学理学部大学院生），
石田克（京都大学理学部大学院生）
小型植物遺体の篩別：田中はる代（京都大学構内遺跡調査会調査員）
木質物の採取：西田正規（京都大学理学部助手）
 ^{14}C 年代測定試料の採取：山田治（京都産業大学理学部教授）
調査員・調査補助員：津隈久美子，上島善治，久保田健二，飛野博文，
小原潤子，鈴木晴美，藤村早苗
作業員：橋本庄次，橋本俊夫，井口繁司，大島與一，福井長治，安田史郎，
安田秀男，小寺末之，赤澤渡，小原祥市，木村栄三郎，福田文治，
牟田正義，吉田龍太郎，中島まつえ，池田イン，佐藤はつえ，
榎木久子，榎木マツ，中村コト，中村皓子，藤木恵美子，
藤木チエ子，堀内千代

(3) 報告書の作成

出土した資料が多種類であったため，現場作業に参加した構成員に加えて，多くの分野の方々へ依頼し，それぞれの遺物・遺体の同定・分析作業をおこなった。報告書の作成にたずさわった関係者は次のとおりである。

遺 跡：泉拓良，宇野隆夫
土 器：泉拓良，家根祥多（帝塚山大学文学部助手），
玉田芳英（京都大学文学部大学院生）
石 器：泉拓良，森本晋（京都大学文学部大学院生）
堆積物：石田志朗，竹村恵二，飯田義正
石 材：石田志朗，桂郁雄（京都大学理学部大学院生）
花 粉：中堀謙二
木 材：嶋倉巳三郎（関西外国語大学教授），島地謙（京都大学木材研究所教授），
伊東隆夫（京都大学木材研究所助教授），林昭三（京都大学木材研究所助教授）
種実類：粉川昭平，南木睦彦，山尾正之（大阪市立大学理学部大学院生）
昆 虫：日浦勇（大阪市立自然史博物館学芸員），
宮武頼夫（大阪市立自然史博物館学芸員）
 ^{14}C 年代測定：山田治，木越邦彦（学習院大学理学部教授）

2 遺跡の立地と周辺の縄文遺跡

(1) 比叡山西南麓の遺跡群

発掘調査をおこなった北白川追分町遺跡を含む比叡山西南麓遺跡群は、近畿地方では、縄文時代の遺跡がもっとも密集している地域のひとつである。この地域は、岩倉盆地と京都盆地との間に張り出した古生層の丘陵を北限とし、下部洪積層が東へ張り出る蹴上付近を南限とする範囲であり、比叡山から大文字山の山稜線に源をもつ数本の小河川が形成した複合扇状地が南北に並んでいる⁽¹⁶⁾。そして現地地形からは、北から、音羽川と一乗寺川の形成した扇状地、白川の形成した扇状地、鹿ヶ谷の扇状地を識別できる⁽¹⁷⁾(図3)。

これらの扇状地上およびその周辺には縄文遺跡が多く、音羽川流域には修学院小学校遺跡⁽¹⁸⁾(縄文後期～晩期)、一乗寺川流域には一乗寺向畑遺跡⁽¹⁹⁾(縄文早期・後期～晩期)、旧白川流域(北白川扇状地)には北白川別当町・同小倉町遺跡⁽²⁰⁾(縄文早期・前期～後期)、北白川上終町遺跡(縄文早期・中期～後期)、北白川追分町遺跡(縄文前期～晩期)、吉田山西麓遺跡(縄文後期～晩期)の諸遺跡があり、現白川が西流する岡崎付近でも縄文時代の遺物の

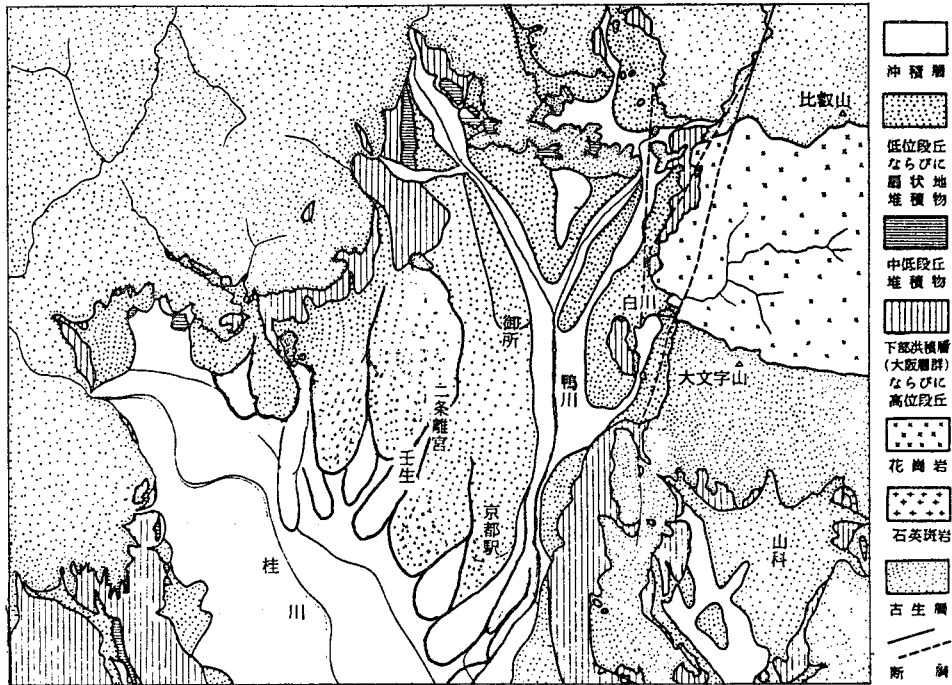


図3 比叡山西南麓の地質(石田志朗による) 縮尺 1/140000

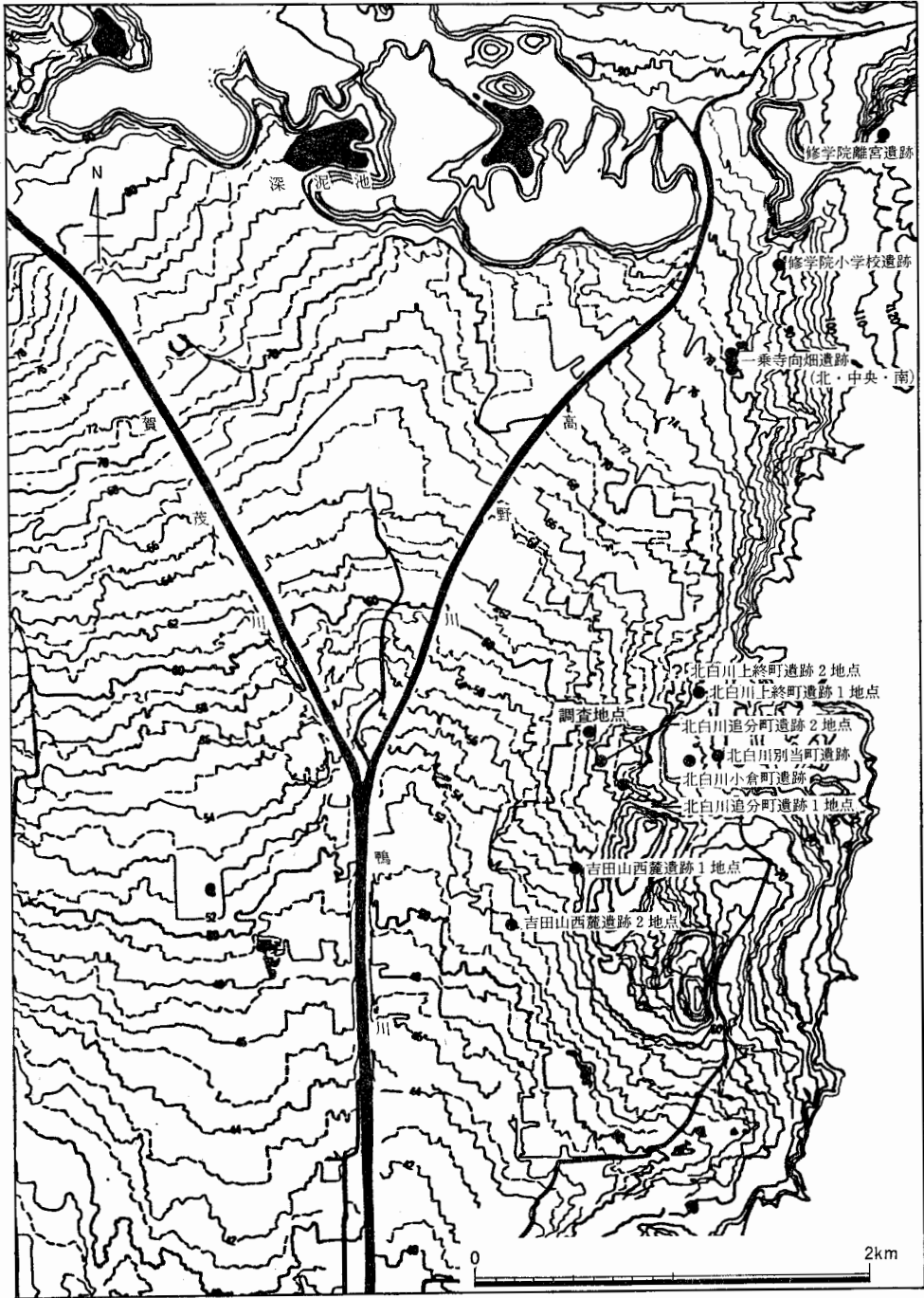


図4 比叡山西南麓の地形と縄文遺跡 縮尺 1/36000

晩期後半(滋賀里Ⅳ式～長原式)にある。本調査区から出土した、多量の動・植物遺体は、この北白川扇状地末端に位置する北白川追分町遺跡が栄えた時期における、生活の具体相と、遺跡の盛衰・移動の背景を知るための重要な手掛りとなるものである。

〔注〕

- (1) 泉拓良・宇野隆夫「京都大学北部構内B G 31区の発掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』1980年
- (2) 梅原末治『京都帝国大学農学部敷地ノ石器時代遺跡』『京都府史蹟勝地調査会報告』第5冊, 1923年
- (3) 島田貞彦「京都市北白川追分町発見の石器時代遺跡」『考古学雑誌』第14巻第5号, 1924年
- (4) 岡田保良・吉野治雄「京大理学部遺跡B E 29区の発掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』1979年に収録。
- (5) 石田志朗・中村徹也『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』1972年
- (6) 京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学埋蔵文化財調査報告 第1冊 ——京大農学部遺跡B G 36区——』1978年
- (7) 中村徹也『京都大学理学部ノートバイオトロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』1974年
- (8) 中村徹也『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要』Ⅰ, 1974年
- (9) 中村徹也『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要』Ⅱ, 1975年
- (10) 京都大学農学部構内遺跡調査会・京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』1977年
- (11) 泉拓良「京都大学北部構内の地形復原 ——縄文時代から弥生時代——」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』1978年
- (12) 吉野治雄「理学部合同建物および北部構内電気管埋設予定地の試掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』1978年
- (13) 注(4)の文献に同じ
- (14) 注(4)の文献に同じ
- (15) 注(1)の文献に同じ
- (16) 石田志朗「京都盆地北部の扇状地 ——平安京遷都時の京都の地勢——」『古代文化』第34巻第12号, 1982年
- (17) 国土地理院発行 土地条件図「京都」参照。
- (18) 梅川光隆氏の御教示による。
- (19) 佐原真「京都市一乗寺縄文文化遺跡の調査」『古代文化』第7巻第2号, 1961年
- (20) 梅原末治ほか「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第16冊, 1935年